ISSN 2186 − 3989

評価との結びつきを考えた道徳ノートの活用について

東風　安生

Use of Moral Notes in Relation to Evaluation

Yasuo Kochi

北　陸　大　学　紀　要
第45号(2018年12月)抜刷

北陸大学紀要
第 45 号（2018）
pp.1～13
〔研究ノート〕

評価との結びつきを考えた道徳ノートの活用について

東風　安生*

Use of Moral Notes in Relation to Evaluation

Yasuo Kochi*

Received May 30, 2018
Accepted June 15, 2018

Abstract

It has been found that there are two points to keep in mind when using moral notes. First, it is necessary to guarantee the time when the child can conversation the description of oneself at the previous time when the student uses the morality note which can look back at the description of me before. It is important to patiently read the text of your notes written before.

Second, it is necessary to conversation from the comparison of the previous time and the book description What a new awareness of oneself was. This reflection is the self-esteem activity of each child. If the child himself evaluates whether morality has grown as an individual in the first stage, the evaluation activity will lead to the next study.

はじめに

道徳ノートは市販されているだろうか。市販されている学習ノートの中で，国語や算数，理科などのノートはよく目にするが，道徳ノートが市販されていると聞いたことがない。実際に数件のスーパーや大型文具専門店に行ったが，道徳と表紙に銘打ったようなノートはなかった。これまでに領域だった時代の道徳の時間には，道徳用のノートは必要だったのだろうか。道徳教育の専門書である雑誌『道徳教育』（明治図書）の 2017 年 9 月号では，特集テーマが「あなたはノート派？ワークシート派？」だった。このタイトルからしても，道徳の時間にノートだけでなくワークシートが多く用いられていることがわかる。

これまでの 100 以上の道徳に関する授業研究を参観した。それぞれの学習指導案を確認した。すると，授業において道徳ノートを用いたクラスは合計で 5 つだったことがわかった。残りの授業では用意したワークシートに記入するか，低学年では役割演技で話し合い中心だった。

*経済経営学部　Faculty of Economics and Management

第１章　道徳ノートについて

１　ノートの役割

ノートの役割を、児童生徒の学習活動の中からふりかえってみる。すると、以下のような活動のためにノートを使用すると考えられる。「記録，メモ」のため、「作業，演習」のため、「創作」のため、「文章表現」のため、「グラフ，表，図やイラスト」作成のため、「評価」のためなどである。

この中で，評価については指導者側が中心であり，他の目的は学習者側が中心の使用目的であった。

２　「特別の教科 道徳」が実施されるにあたって

平成 30 年度から小学校で本格実施された「特別の教科　道徳」は，これまでの領域だった時代の道徳授業から脱皮を図ろうとしている。「考え，議論する道徳」をキャッチフレーズに，質の高い指導方法（問題解決型学習，自我関与型学習，道徳的体験を生かした学習）を用いながら，児童は多面的・多角的に考える学習が進められる。

指導方法の改善とともに，教科化されたことに伴い検定教科書が用いられることになった。また，評価についてはこれまでは指導要録には特に記入欄が設けられていなかった。今回からは，「特別の教科　道徳」に関する評価欄が設けられることになり，記述式の所見で評価する。評価の視点としては，道徳科の学習状況と道徳性に関わる成長の様子であり，個人のよさを見取りながら形成的な評価を行う。

３　検定教科書における道徳ノートの存在

小学生向けの検定教科書がつくられることになり，これまでの副読本を作成していた教科書会社等 8 社が参入することとなった。各社とも，初めて作られる道徳科の教科書に対する意気込みは強く，各社のホームページを見るとよくわかる。とりわけ，道徳科の検定教科書を作成した会社のうち，いわゆる教科書以外にも，児童が書き込めるノートと呼ぶような冊子を一緒に添付した会社が 3 社あった。

3 社のホームページに目を通すと，そこには一般的にはノートと呼ぶだろう冊子（ここからは，「道徳ノート」と呼ぶ）についての特長をクローズアップしている。それぞれ自社のセールスポイントを強調しながら道徳ノート作成のねらいを紹介している。これをまとめると以下の 3 つになるだろう。

・道徳の評価のために，道徳ノートの活用を図る。
・言語活動の活性化を図る。
・児童の学習活動の記録・保管を図る。

このうち最初の評価については，Ａ社は「児童の道徳性の成長の様子や学習状況を継続的に把握でき，児童理解の手立てとなり，指導や評価に役立ちます」として，具体的に「児童の成長を受け止め，認め，励ます個人内評価」や「個々の内容項目ごとではない，おおくくりなまとまりを踏まえた評価」，「一年間の授業という長い期間の中で変容を見とることに繋げる。」と示されている。また，Ｂ社は「評価の根拠に」というタイトルで「ノート

への児童の記述は，教師が一人一人の学習状況や道徳的価値の理解の程度，道徳的成長などを見取る材料となり，児童に向き合い，寄り添うための大きな手がかりを示してくれます。」としている。C社は，道徳ノートとは呼ばずに，「活動」という名称を付けて，「活動に書き込んだり，ワークシートを貼ったりすることで，学びの深まりを実感できるポートフォリオに。」と書かれている。

第２章　研究の目的と方法

１　研究の目的

道徳ノートが教科書会社から教科書と共に出版されている場合がある現在，指導者側の視点から評価のための効果的な道徳ノートの使い方について明らかにすることを本研究の目的とした。

２　研究の方法

筆者の前任校である私立小学校において，教頭として全クラス（１～6 学年まで各３クラス）に道徳授業を実施した。年間 6 回ずつ各クラスで道徳指導を行った際に用いた道徳ノートが，評価のためにどのように活用できたかを確認するために，第 5 学年についてはクラスごとに評価の方法を変えて，比較検討を行った。具体的には、指導した授業を IC レコーダーで記録し，その際に使用したワークシートや道徳ノート等を回収する。教師の発問や作業の指示に対して，児童がどのように記述したかについて，提出したものを確認する。教師のねらいとした部分に近づいているかどうかを評価する。ただし，3 組はノートやワークシートを活用しない指導方法だったために，児童の発言を逐語録におこして，これをふりかえる方法をとった。

第３章　道徳科における評価について

１　道徳が教科化されたことを受けて

道徳が「特別の教科 道徳」（以下、「道徳科」）となって，検定教科書を授業で使用することとなった。これまで領域だった時代には，道徳の時間に使用されていた教材は，副読本と呼ばれていた。この副読本を作成していた教科書会社や出版社が検定教科書の作成を検討し始めた。販売網の関係があり，販売規模の小さな出版社や教材会社は参入を見合わせた。検定教科書に向けてどのような内容にしていくか，あらためて検討が繰り返し行われた。学習指導要領の一部改正による「解説書　道徳編」を参考にしたのはもちろんであるが,2020 年度から本格実施される新しい学力観との関連が強いものとなった。道徳科がその先駆けとなり, 21 世紀に求められる資質・能力が全面に出される形となった。

２　評価と道徳ノート

文部科学省は道徳に関する専門家会議を開催し,報告書を提出した。「質の高い指導方法」が示された。各教科書会社はこれを検定教科書に反映できるように，学習の手引き等で工夫を図った。ただし，この学習の手引き等を作成するにあたり，別冊にしたり，読み物資料の中に入れたり，コーナーを設けたりと編集方法は各社で異なった。

「はじめに」で紹介したようにＡ社～Ｃ社は別冊のノートを作成し，本体とペアでセット化して出版した。ただしＡ社は，本体のみの販売も可能とした。この別冊を「道徳ノート」と称して検定教科書を作成する会社も登場することとなった。これにより，これまでノートは児童生徒側の学習者が，別途買い求め，そのノートを教師の指示に沿った形で使用していたものが，検定教科書にセットで付いてくるという現象が起こることとなった。

３　道徳ノートがセット化されるわけ

検定教科書に道徳ノートがセット化されたわけを考えてみよう。指導者にとって，道徳科の指導は領域の時代にも当然実施してきた。ワークシート等を用いて，児童生徒の書き込みをさせたり，ワークシートを話合いの材料にさせたりした。しかし，道徳の授業に関する評価については，教師側から見て不十分な点が多かった。新規採用者もベテラン教師も，道徳科については初の試みである。検定教科書を作成する会社は，学校現場のニーズとりわけ教師のニーズは，この評価にあると判断している。そして，編集会議等で話し合われた点は，この道徳科の評価について教材としてサポートできるものをどのように検定教科書の編集において盛り込むことができるかだったのである。

これまで評価に用いたものは，授業で使ったワークシートが中心であった。評価の視点は教師用指導書や教師用教科書，学習の手引きなどによっていた。そして，道徳ノートが複数会社から登場するといういきさつである。

４　道徳ノートのメリット・デメリット

道徳ノートが検定教科書とセット化して付いてくる場合，この道徳ノートにはどのようなメリットがあるか，デメリットがあるかふりかえってみよう。

まず，デメリットだが，教師の裁量で書かせていたワークシートが道徳ノートとなり，教科書会社が毎回使用する児童向け教材までセットにすることはやりすぎだという声がある。教師の指導者として指導する部分がなくなってしまうのではないかというのである。35 編の読み物に該当する発問が道徳ノートに書かれている教科書もあり，これでは教師の指導する範囲が固定されてしまうのではないかとの声もある。道徳が領域時代から大切にしてきた，教師による自由で多様な指導方法が限定されてしまわないだろうか。副読本時代にも，道徳は副読本とセット化したものとしてワークシート（登場人物のイラストとそこに吹出しが描かれたものなど）がＤＶＤに納められていた。これを使用すれば十分ではないかという声もあった。

一方で，メリットは何だろうか。道徳科になって，これまで道徳の指導はちょっと苦手だと敬遠していた人が少なからずいた。彼らは，道徳の時間は学級指導をはじめとする特別活動の時間に自らの裁量で変更していた。また，道徳は学校の教育課程全体で取り組ん

でおり，道徳教育はそこで実施しているから大丈夫であるという理屈で，道徳を実施したとカウントしている教師も少なからずいた。しかし「特別の教科 道徳」となり，道徳科の時間の評価が課せられたことで，誰もが検定教科書を用いて，児童生徒に道徳授業の質保証を果たすこととなった。

教科書の内容について発問が示されている道徳ノートは，こうした状況の教師たちの不安な状況に対して，水先案内人となるものとなった。また，道徳科の時間を評価するための評価材料として,また評価の基準として道徳ノートを活用することができるとした。

第４章　道徳科の評価の特徴とノートの関係性

１　個人内評価をすること

教育の目的は人格の完成にある。この人格の完成に大きく影響しているものは，道徳性の育成である。改正教育基本法に示されたこのねらいに照らし合わせて，道徳科の指導において人格に触れる道徳性を評価してよいのか。しかし，指導には目的があり，指導の実践があれば，必ずそこに目的に照らして実施した実践とその対象である児童生徒の変容等の評価が求められる。これがＰＤＣＡサイクルを回す基本概念である。

2 項対立の状況において，領域時代の道徳では，道徳性の評価についてふれることはある意味タブー的な部分であった。しかし教科化された現在，この課題に対して思い切った改革が行われていると感じる研究者は少なくないだろう。そこで道徳は改めて道徳の評価においては，個人内評価が原則であることを学習指導要領にも明記したのである。

２　よさを積極的に評価すること

一人一人が他者と比較するのではなく，以前の自分と今の自分の道徳性の変化を評価することとした。人は，弱い生き物ではあるが，その弱さ・醜さを乗り越えていく強さ・気高さをもって生きていくことができる。この信念のもとに，よりよく生きようとする姿を積極的に評価することが，道徳科における道徳性の成長の部分の評価だと言える。整理すると，道徳科における道徳性の評価については,「個人内評価」,「道徳的価値に照らした個人のよさの積極的な評価」の２つがポイントである。

３　パフォーマンス評価とポートフォリオ評価

また,この２点を評価する手法としては,児童生徒が学習場面でみせる発言や文章表現,役割演技等での様子などを評価する「パフォーマンス評価」[*1]がふさわしいとしている。また，数値化しにくい児童生徒の内面に関わる評価に活用できる手法として，その場その場での個人の様子を記録し,積み重ねていく中で,過去と現在の違いを比較検討できる「ポートフォリオ評価」[*2]を取り入れることが可能である。目に見えにくい児童生徒一人一人の成長とよさを評価するためには，この２つの手法を適切に取り入れていくことが，道徳科の評価につながるだろうと，永田[*3]も言っている。

学習におけるパフォーマンスをポートフォリオ型に整理し，この整理されたものを継続

的に診断する。このパフォーマンス評価が積みあがることで，学習状況の変容もわかる。文部科学省が示した評価に関する視点である「個人の学習状況および道徳性の変化」が，この２つの評価方法を用いることで満足できることになるだろう。

押谷*[4]は，児童生徒が道徳ノートを使用することで，それが可能になると言っている。「子どもたちがみずから実感できるようにするためには，授業のことやその後の学びなどについて記録できるノートが不可欠です。それは，ポートフォリオ的評価にも使うことができます。ノートには，道徳の授業での学びを明確に記入し，授業前に調べたことや，授業後の学びや取組み等も記述できるようにします。」

第５章　道徳科の指導における評価の実際

１　教頭による道徳科の指導

筆者は前任校で私立小学校の教頭を務めていた。道徳については，教頭が各クラスに年間６回ずつ入って，道徳授業を実施することになっている。そのため，各学年３クラスずつあるので,全クラス 18 学級に対して学期に 2 回ずつで 3 学期まで実施することになった。合計で 108 時間となる。

こうした指導体制で進めてきた 3 年目の 2015 年春に,新採教員が 1 名入ることとなった。この先生は 5 年生を担任することになった。新採教員は不慣れの部分が多いため，学年主任と教頭が一緒に対応していく形をとり，道徳授業については年間でこのクラスは教頭が入り，時に新採が授業するなど新採の研修も兼ねたものとなった。

5 年 2 組の担任となったので，新採教員と相談して道徳ノートを作ってほしいと依頼した。理由は，教頭なので，毎時間 5 年 2 組の教室にいることができないこと，教頭としてできる限り児童の授業での様子を評価するために授業以外の時間がほしいこと，毎回のワークシートを作成しても，それを保管する場所がないことなどを挙げた。新採教員は理解を示した。

その後，5 年生の学年会に参加して，第 1 回目の会議で，道徳ノートをすべてのクラスで使用したいと提案した。ところが，3 組の先生からはノートの冊数が増えて困る。ただでさえ，ランドセルに入れる荷物が社会科の資料集や算数の問題集など多くなってきているところに新たな持ち物は負担になると言ってきた。学年主任からは，保護者会でどのようなノートを買い求めるように伝えるか具体的なイメージがわかないので説明できないという話が出てきた。道徳ノートというこれまでにないノートを増やすことに難色を見せた形となってしまった。

そこで5年生の3クラスは以下のように,教材が様々な形となって進めることになった。

1 組　読み物資料に関する発問を中心に作成された今までのワークシートで学習を進める。
2 組　道徳ノートを用いる。（市販５ミリ方眼ノート）
3 組　記述する教材はない。（評価のため，記録を IC レコーダーで筆者が録音することにした）

２　教頭による道徳科の指導のその後

1 年間指導を継続してきた。その結果，3 クラスが道徳科の授業において異なる教材を使

用したことで，逆に道徳ノートを使用したクラスの効果が見えてくることとなった。

(1)　1組の様子

ワークシートで授業を進めることとなった1組について，まずはふりかえる。1組は，1年間を通してワークシートを用いた道徳授業を継続してきた。図1で示したとおり，およそ2つの発問を文章で表し，それに対して自分自身の考えを書き込めるような形にした。

1 年間継続していく中で，指導している側として困ったことは，評価する時期（7月，12 月，3 月）になって，児童が持っているワークシートをすべて提出してもらうように言うと，ほとんどの児童がワークシートの何枚かを紛失していた。フラットファイルを全員に購入してもらうように担任教員に依頼した。クラス全員がワークシートに記述して，それを筆者が回収して，チェックして検印を押し，穴をあけて返却した。ところが，そのワークシートをきちんとファイルに閉じないで,後回しにしたり，あわてて片づけたりして，紛失している。どの児童も 35 回分のワークシートをすべて持っている児童は，36 名中 5 名だった。

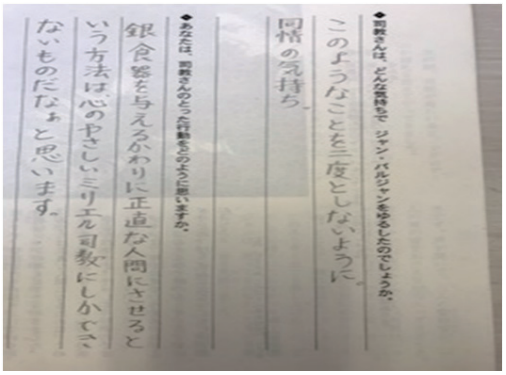

図１　5 年 1 組の児童が書いたワークシート

また，学期途中に道徳科の指導における内容項目で，生命尊重の価値に関する指導を行うことがあった。生命尊重の価値については，複数回の授業を実施した。そのため，前回の学習した内容を積み上げて，そこから次の授業にうつるような指導計画を立てていた。ところが,授業の際には必ず持参するように連絡しているにもかかわらず,児童の中には，図 1 のような生命尊重の前回の授業のワークシートを忘れたという児童が何名もいた。2～3 名ではなく，8 名に及んだ。これでは前回のふりかえりをして，その時点からの生命尊重の価値を深めていく学習に至るには時間がかかってしまう。「生命尊重の価値にかかわる前回学習したワークシートを見てください。」と言っても，全員がふりかえることができない。そのため児童を一人でも残しておくことのないようにするため，どんな学習内容で，どういう発問に対してどんな話合いがあったかを代表児童に発言してもらって，その情報を全児童で共有するまでに時間がかかることになった。

指導者側の反省としては，ワークシートにコメントを記入して児童に返却する際にはコピーをとって，同じ物を指導者も共有しておくことで，学期末になって評価するために再度フラットファイルを提出させた際に，ワークシートが収められていないということを防ぐことになる。また，コピーをとっておくことで，学習者側にとっては，同じ内容項目について学習したことをふりかえって，そのレベルから学習を継続して深めていく場合に，ワークシートがない場合に大変に困る。自分自身の学習のふりかえりが記憶だけに頼ることになる。そこでコピーを確認しておくことでスムーズに本時の学習に入ることができる。

(2)　3組の様子

道徳ノートの提案に対して，否定的な意見だった担任に対して，とくに記述するような

ワークシートやノートなどの紙媒体を用いずに1年間道徳科の授業を継続した。

そのことにより，指導者側としては，児童が記述したものが後に残っていない。記録として残っているものは，ICレコーダーで記録した授業の会話である。そのため，道徳科の評価をする際に，児童一人一人の道徳性の深まりをつかむのに手間がかかった。毎回の授業を音声記録でふりかえり，児童一人一人の発言を名簿の横の欄に書き込む。これを教頭が担当した道徳授業年間6回すべてで実施した。6回の授業とは言え大変な作業であった。

また，6 回分についての一人一人の児童の学習状況や道徳性の深まりについての評価を記述式で，担任に報告する場合に，こうした音声を文字に起こしたものをつかわなくてはならなかった。

5 年 3 組の男子児童Ａ男とその他クラスの児童の様子について，音声データをもとに事例として取り上げる。以下にＡ男の発言と周囲の児童の様子をまとめる。

○第 1 回　資料「いのちの輪」（学習研究社
『みんなのどうとく』より）

積極的に挙手をして，「命はおじいちゃんやおばあちゃんのもっと前からずっとつながっている」と生命の連続性について発言する。周囲からは、「私もＡ男くんと同じです」という発言が 3 人から出てくる。

○第 2 回　資料「ヒキガエルとロバ」（学習研究社『みんなのどうとく』より）

役割演技で挙手をして，クラスの前に登場する。主人公のアドルフに自我関与できている。しかし，第 1 回で学んだ生命の連続性の価値観を基にした発言は見られなかった。

○第 3 回　資料「すれちがい」（学習研究社『みんなのどうとく』より）

ディベート方式で話し合いを行った。「すれちがい」の資料を，途中で立場を変えて考えた。反対側に回っても，相手の友達の意見を聞いて，「反対になってみるとずっと待っていたのだ」という大変さが分かったと多角的に発言していた。

○第 4 回　資料「銀のろうそくたて」（学習研究社『みんなのどうとく』より）

ジャンバルジャンに対して，「きっと改心してよい人間になると思う。なぜなら，司教様のやさしさに心から感謝していたからです」と強い思いを発表していた。しかし，これまで 3 回で学んだ生命とは互いに支え合い，連続性をもってつながっている価値について触れる発言は，だれからもなかった。生命のかけがえのなさよりも，司教の思いやりの価値に関して，クラス全体の意識が高まっていったように判断できる。

○第 5 回　資料「ひとふさのぶどう」（学習研究社『みんなのどうとく』より）隣の人と意見交換するときに，自分から話しかけている。友達の話を聞くときは，手遊びなどせずに，にこにこ笑いながら聞いている。（ビデオ録画により確認した部分）

○第 6 回　資料「命を見つめて」（学習研究社『みんなのどうとく』より）

ねらいとする生命の有限性について「猿渡　瞳さんは，一回しかない命の機会を精一杯輝かせようとしたと思います」と中心発問で最初に発表していた。5 年生の生命尊重のねらいについては，一回しかないかけがえのない生命の大切さについて心情をふかめることとしていたので，ねらいは達成されたと言える。

この授業記録から考察できる点として，以下のことがあげられる。学習者側にとっては，毎時間の授業において，前時に同じ内容項目で触れた部分についてのふりかえりをする場合，しっかりと理解して記憶している児童のふりかえりの発言や教師主導のふりかえりによって思い出す程度になってしまう。一人一人が自分自身の前時の道徳授業の学習をどこまでしっかり思い出せていたか，また本時の授業に役立てていたか不明な場合が多かった。児童本人にしてみても，自分がどれだけこの道徳授業で学習がふかまったかを感じ取りにくかったと推測される。

(3)　2 組の様子

学習者側から見た場合，道徳ノートを用いた学習をしてきたことで，プラスになった点がいくつかある。1 つ目には，同じ内容項目で 2 度の学習をする際に，前回の授業をふりかえって学習したことを思い出す活動をした際に，道徳ノートを一人一人がめくって，前時の学習した部分を見直していた。ノートを見ながら，「ああ」とか「そうだった，そうだった」などと独り言をいう児童が何名もいた。

また，前回の授業をふりかえる導入段階では，すぐに道徳ノートをめくって確認をしていたので，学習活動はほとんどの児童が前回の学習を終えた部分からすぐに次の段階に進めることができた。自分自身の新たな価値観に気付いた段階にすぐに戻ることができ，そこからより高い価値観を考える　段階にうつることができる。

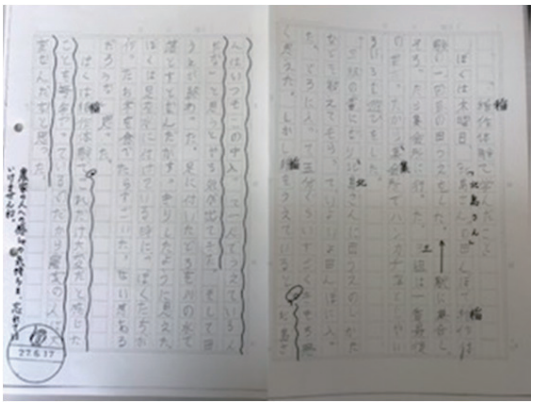

図 2　2 組の児童が用いた道徳ノートの一部

さらに，指導者側からは道徳ノートに一人一人が学習して考えたことを記述しているので，評価については，図 2 のような記述をもとに道徳性の成長を見ることができる。道徳ノートによって，とても安心することができた。評価をする場合に，その評価する材料については記憶にたよる 3 組やワークシートがすべてそろわない 1 組に比較して，2 組の道徳ノートはしっかりすべてが文字化されているからだろう。一人一人の学習の跡が「見える」化されていて，大変効果的だったと考えられる。

次に 5 年 2 組のＢ男の 6 回の道徳ノートの記述を確認してみる。以下に、Ｂ男の道徳ノートに残された記述からの抜粋を示す。

○第 1 回　資料「いのちの輪」（学習研究社『みんなのどうとく』より）

「ぼくは，自分のいのちがお父さんとお母さんからもらったものと思っていましたが，でもおじいちゃんやおばあちゃん，そのおじいちゃんやおばあちゃんまでずっといたから自分のいのちがあるのだと思って，びっくりしました。」

○第 2 回　資料「ヒキガエルとロバ」（学習研究社『みんなのどうとく』より）

「アドルフたちが石をポロリと落としたのは，ヒキガエルにもそのお父さんとお母さんがいて，ずっとつながってきたいのちなのに，それをロバは気が付いて踏まないようにしたのに，自分が気付かなかったことに考えこんだからだと思います。」

○第 3 回　資料「すれちがい」（学習研究社『みんなのどうとく』より）

「みんな同じように考えていると思ったけれども，ぜんぜんちがっていた。反対側から考えるとおもしろいなあと思った。これからは、ほかの人の方向からも考えなくちゃいけないと思った。」

○第 4 回　資料「銀のろうそくたて」（学習研究社『みんなのどうとく』より）

「ジャンバルジャンに対して司教さんは，教会の人の立場ではなくて，困っている人の立場から考えることができたから，優しくできたんだと思う。」

○第 5 回　資料「ひとふさのぶどう」（学習研究社『みんなのどうとく』より）

「先生が何を伝えたかったのかが，なんだかわかる気がする。ぼくも 4 年生の時そうだったけれども，だれでもしっぱいするから，相手の人の方向から考えないといけないことを

教えようとしたのだと思う。」
○第６回　資料「命を見つめて」（学習研究社『みんなのどうとく』より）
「猿渡瞳にもしもぼくがなったら，こんなに強くは生きていけないかもしれない。でも，ジャンバルジャンだったら，司教さんに教えられたように精一杯に生きることが大事だと気付いたから，猿渡さんのように，頑張るだろう。ジャンバルジャンは，きっと猿渡さんのように思えるようなつらい経験をしたのだからわかるのだと思う。ぼくは，そんな経験はしていない。でも，できるだけそういう人の気持ちがわかるように想像して，命を大切にしていきたい。」

2 組が道徳ノートを用いたことによる結果を児童一人一人の変化から考察するが，Ｂ男を典型とするように，評価の面で良い点が発見できた。それは，児童一人一人が自己評価する際に，前回の自分の考えや思いがすぐにノートのページをめくることでふりかえりができた。指導者としては，児童が前回の学習したことを生かして本時に臨むことができる点でよかったのだが，学習者側から見ても自己評価をするという活動において，自分自身がどのようなことを考えていたか，それに比べて現在はどの程度成長したかがわかる。これは，同じ道徳ノートを使って，すぐに以前の自分と今の自分の思いや考え方を比較できるところから生まれる自己評価活動である。この自己評価を児童一人一人が行うことが 2 組は実現できたことは大きなメリットだったと言えるだろう。

第６章　道徳ノートの評価における利点

１　学びの継続性

道徳ノートを用いることでの利点は，第一に道徳ノートという同じ教材を続けて使用することによって，学びの継続性が維持されるということがある。同じノートに記述していくことは，学習者である児童一人一人にとって利点があるだけでなく，指導者である教師にとっても利点がある。学習者にとっては，道徳学習をふかめていくために有効な手段となるのだろうが，指導者にとっては道徳科における最大の課題となっている評価に関して有効な手段となる。ここでのキーワードは，「継続性」である。この「継続性」について，道徳ノートを使用することで保障しているということにつながっていく。

２　学習者にとって道徳ノートのメリット

学習者である児童一人一人にとって，道徳ノートを用いることの最大のメリットはこれまでの学習を一目瞭然としてふりかえりやすい点にあろう。しかし，このふりかえりという活動は単に学習活動を思い出すことではない。

自分自身の前の考え方と，本時の考え方を比較して，自分によって自分自身の道徳性の高まりを評価できる。これを自己評価活動と呼んでもよいだろう。道徳ノートの前の方のページに書かれている自分の記述を読んで，自分自身がその段階よりも気づいた新たな価値観のつみかさねを確認できる。自分自身の道徳性の成長を，道徳ノートの継続的使用によることで実感できるのである。

３　指導者にとって道徳ノートのメリット

指導者側にとっては，道徳ノートを用いるメリットは，学習者側と比べて評価に関して多くの点がある。

第１に，学習者である児童が自己評価している姿を見て，その児童を評価できる。しっかりと前時の学習をふりかえっているかとか，前時と本時を比べて自分自身の道徳性の成長を実感できているかどうかを道徳ノートでふりかえっているところから評価できる。

第２には，一部の児童の発言で終わることなく，一人一人の考え方が道徳ノートでの記述を通してわかる。これにより，授業全体としての道徳性の高まりだけでなく，一人一人の成長を個別に確認できる。道徳科の評価には，大きく２つの柱がある。一つは，道徳科の時間の学習状況について教師から見た評価を記述すること。もうひとつは，大くくりで児童一人一人の道徳性の成長にかかわる評価である。この２つ目の評価が，道徳ノートでできることにつながると考える。

第７章　評価との結びつきを考えた道徳ノート

今回は表１のような生命尊重に関する指導実践を通して，道徳ノートを実際に使ったクラスとその他のクラスを比較検討する状況になった。予期しないことだったが，これにより道徳ノートを活用することで,道徳科の評価に関わる面でよい点がいくつか確認できた。

表１　生命尊重に関する５年生の授業計画

時	流れ	＜学習活動＞	＜指導上の留意点＞
第	導入	・アンケート調査結果をふりかえる。	・何に関わるかで赦せる基準が異なる点を知る。
一	展開	・『銀のろうそく立て』を読む。	・ジャンを赦す司教の心情を焦点化する
次	終末	・司教の気持ちを整理する。	・多様な価値観が含まれることを知る。
第	導入	・多様な価値についてふりかえる。	・ゆるしに多様な価値観が関わることを確認する。
二	展開	・『ひとふさのぶどう』を読む。	・ジムがどんな気持ちで赦したか整理する。
次	終末	・どんなことで相手を赦したか振り返る。	・どのような価値観を基に赦したか考えることができるようにする。
第	導入	・ゆるしと他の価値観との関連を確認する。	・ゆるしと生命尊重の価値の関連性に気付くようにする。
三	展開	・『命を見つめて』を読む。	・狭渡瞳さんが司教やジムならどうか。
次	終末	・命の大切さを感じた時に赦せるか考える。	・赦す実践ができるよう意欲を高める。

第１に，学習者である児童は自分自身がノートに綴った部分をあとからふりかえることにより，自分の内面の成長を目に見える形で確認できるような指導につながった。これは道徳ノートだったからできることであり，ワークシートであるとファイルにとじていなかったり,順番に整理していなかったりという状況が発生して,効果的に活用できなかった。

第２に，指導者である教師は，自己評価している児童を客観的に確認して，その姿から

児童一人一人が道徳科の授業に積極的に取り組んでいるかどうかの学習状況を把握することができた。

第３には，道徳ノートの以前に書いた部分をふりかえり，本時で記述した部分と比べる活動を行った。その際は，児童が自己評価して気付いたことをさらに発言するようにした。ふりかえった内容をあとから教師が確認することで，教師が行う児童一人一人の個人内評価の大きな参考資料ともなった。

第４に，道徳ノートに，本時の授業だけでなく，道徳教育の視点から内容項目に関連する価値の活動（例；稲作体験活動や学習発表会，総合的な学習の時間における学校の歴史探究など）について自分自身のふりかえりを作文にして道徳ノートに書き加えることで，その活動を行った日付を明記してパフォーマンス評価をするねらいから書き加えることで，道徳教育にかかわるポートフォリオが道徳ノートの中でできあがってくることになった。

道徳ノートを用いたクラスの児童は，自分自身を以前とくらべる発言が授業中に増えるようになった。これは明らかに，道徳ノートに綴られた以前の自分と向き合える機会が増えたからである。道徳ノートの以前のページをめくる活動は，自分自身の以前の姿に出会う活動である。それが，単純に数ページ前のノートをめくるだけでできてしまう。これは何とも便利な活動である。とくに，日付をきちんと入れておいたことで，現時点から比べてどの程度前のできごとなのか，その時点から現在までの自分自身の道徳性が，点と点だったものが線として結ばれる。結ばれることで，自分自身の成長の過程を意識するようになるのである。

第８章　まとめと今後の課題

今回の授業による実証研究から道徳ノートを用いる場合に留意する点として２点あげられることがわかった。

第１は、道徳ノートを用いる場合に，児童自身が前時の自分の記述をふりかえることのできる時間を保障しておかなくてはならない。児童がきちんと自分の記述した文章を読み直すかというと，案外読んでいないことがある。児童の中には乱雑に書いた場合の自分の文字が読めないという者もいた。以前の自分としっかり対峙するためには，以前に書いた自分のノートの文章を粘り強く読むことが大切である。

第２は、自分自身の新たな気付きが何だったのかを前時と本時の記述の比較からふりかえることが必要である。なぜなら、このふりかえりこそが、児童一人一人の自己評価活動であるからと考える自分自身の新たな気付きが何だったのかを前時と本時の記述の比較からふりかえることができるとすばらしいだろう。このふりかえりこそが，児童一人一人の自己評価活動である。個人内評価として道徳性が成長していったかどうか，最初の段階で児童本人が評価できれば，その評価活動自体が次の学習につながっていく。また，指導者である教師は，その自己評価を丸ごと受け止めることはできないが，それでも客観的な評価をする際に，大きな参考資料となっていく。

今後の課題としては，自己評価できる振り返りの時間を保障して，児童一人一人に自らの成長を確認させた際に，それを記録に残すことである。例えば，生命尊重の価値についての学習を以下のようなステップを踏んで学習した際に，それぞれの学習活動の途中で，自己評価した点を道徳ノートに書き込むような時間があれば，この自己評価したこと自体が，生命尊重に関するどういう部分の価値観がより高まったのかが具体的に見えてくることになる。自己評価したことを文章化して自分自身の中で整理することが，評価との結びつきを考えた道徳ノートの活用につながるだろう。

また，どの内容項目を以前に学習したか，またそれはどのくらい前に実施したかなどをふりかえりやすくすることは，道徳ノートをさらに活用するために便利となるだろう。そこでインデックスのシールを道徳ノートのそれぞれに，日付と内容項目などを書き込んで張り付けていくことで，手帳や辞典のように何度も繰ることで知的な発見を推進することができるだろう。

注

1 早川裕隆「パフォーマンス評価」『「道徳科」評価の考え方・進め方』教育開発研究所 2017 年 6 月。
2 東風安生「ポートフォリオ評価『「道徳科』評価の考え方・進め方」教育開発研究所 2017 年 6 月。
3 永田繁雄編著『「道徳科」評価の考え方・進め方』教育開発研究所 2017 年 6 月。
4 押谷由夫「心に響き，心を耕す道徳教育の充実―なぜ，今道徳の授業が必要なのかー」全日中機関誌『中学校　特集 道徳教育』2015 年 5 月号。